

まく調和させて操作していた。製材時は丸太の両側を人間が持って人力で丸太を動かして切る方法をとっていた。何人かが組になって協同作業の型をとっていたが、実に手ぎわがよく、日常ノンビリ動いている人達にしては信じられないような素早い動作であった。

## む す び

たった2か月間では、プロジェクト開始当時の苦勞はわからず、今回は食住についての苦勞もなかった。ジャカルタの税関で研究用資材が20日間も止っていたが、これはインドネシアの事情によるもので、日本と同じに事が運ぶと考えるのはむしろおかしいと思った。これからも、様々な国へ研究者が出かけることになるだろうが、行った先の国の事情・やり方ある程度理解することは大切である。

今回はインドネシア政府が2,000 haの天然林を伐ってジャワ島から農民を移した現場を見た。しかし、そこから遠くない所で日本とインドネシアの協力で数年かけて2,000 haを植え、育てようとしていた。同じ時期に全く反対のことが行なわれているのは、何か納得のいかないことであった。

2か月のブナカット滞在中は、日本側長期専門家の方々には何かとお世話になった。ここに感謝の意を述べてペンをおきたい。

---

## 新刊紹介

◎熱帯多雨林の植物誌—東南アジアの森のめぐみ W. ヴィーヴァーズ-カーター著、渡辺弘之監訳、B6版、209 pp. 平凡社、1986年7月15日発行、1,700円

本誌の2号(1985.1)に“豊かな降雨林”という訳で紹介された、W. VEEVERS-CARTER: *Riches of the Rain Forest (An Introduction to the Trees and Fruits of the Indonesian and Malaysian Rain Forests)* 1984が、渡辺弘之氏と門下生たちによって翻訳、出版された。熱帯林が危機にさらされていることは近頃よく知られているが、その熱帯林がどのような森林であるか、正しい知識をもっている人は意外に少ないのではないかと思う。本書は、原著の副題(上記括弧内)が示しているように、インドネシア、マレーシア両国の多雨林の特徴を、代表的な樹木—フタバガキ科、フトモモ科、ニクズク科の樹木やラタンなど、および果実—ランブタン、ドリアン、ジャックフルーツなどの解説を通して興味深く紹介している。原著者はそのまえがきに、“これは熱帯多雨林のしろうと向けの案内書である”と述べているが、多雨林に関する多彩な内容が平易な訳文と相俟って大変楽しい読物となっている。

(浅川澄彦)